



地名余録 (3)

齋藤 廣志

(12)

いささか旧聞に属するが、学生の引率教官として東京周辺を駆け回っていた時のこと、都内の数工場を見学して、明日は藤沢にある一社を訪ねる予定になっていて、その夜の宿泊は江ノ島であった。

一行を乗せたバスは今夜の宿泊地へと向かってひた走っていた。鎌倉を通過しつつ、新人らしいガイド嬢が有名な与謝野晶子の短歌を朗唱した。

鎌倉や御佛なれど大佛は美男におわす夏木立かな

学生の誰かからクレームがつかぬかと思いましたが、全くその気配はなく、私もその場では無言でいた。

ほどなくバスが小休止した際、ガイド嬢がバスから降りたので、私も下車して、先ほどの晶子女史の歌は「御佛なれど大佛は」ではなく「御佛なれど釈迦牟尼は」のはずだと告げると、そそくさと虎の巻を取り出して、これには「大佛」になっていると言って、その頁を示してくれた。とすれば、今年の新人さんは皆「大佛は」とやっているわけで、肝心の虎の巻が間違っているのだから、彼女らも被害者なのであった。

ついでに先刻横浜を過ぎるとき、その地名語源を「横にのびている浜」と説明したが、それも虎の巻にそう記載されているのを確認させてもらった。

海辺へ行けば、誰でもまず水平線と正対して立つと思うが、そうすれば浜は横に延びている。浜が横にのびているというのは常凡す

ぎて特異性がない。いろんな地形があるから絶対とは言えないにしても、横浜が横にのびた浜というのは賛成いたしかねる。

角川小辞典の「地名の語源」(鏡味完二・鏡味明克著)には一説として「横の浜」ではなく「浜の横」の意と記されているが、これについては校倉書房の「続地名語源辞典」(山中襄太)に詳述されているので一読願いたい。

(13)

ここまで書いたところで、旅行中の家妻から電話があった。「おせん泣かすな馬肥やせ」的な電話だが、昨日は橋立をみて、これから三方五湖に向かうそうだ。毎年グループの旅行があって、この度の天の橋立に参じたことで日本三景を全部実見したことになり、松島より知らぬ小生にとっては引け目をおぼえるなどと言えば多分にオーバーであるが、三景と言えば日清戦争後の黄海の海戦の主力艦は厳島、松島、橋立で、これを三景艦と呼んだ。戦後練習艦になった松島は火薬庫の爆発で沈没し、厳島、橋立は襲名した二代目の艦が生まれたが再び三景艦が揃うことはなかった。私の地名への関心は小学四年の頃、このような鑑名から始まったと思っている。

橋立については、前期校倉書房の辞典の正篇にくわしい。横浜が浜の横であるのと同じように、橋立は立てた橋、即ち立橋の意味であり、この橋はブリッジではなくて、ラダー即ち梯子だと言う。

そもそもハシとは何かと言えば、A点とB点を接続する、つないでいるのがハシであっ

て、ハシゴは地面と屋根をつなぎ、ハシラは床と天井をつなぎ、キザハシ（キダハシとも）は階段であって、刻みのついたハシである。沖の船と陸岸をむすぶのがハシケというのも面白く、食器と口の間を往復するハシも同類だと説明されている。

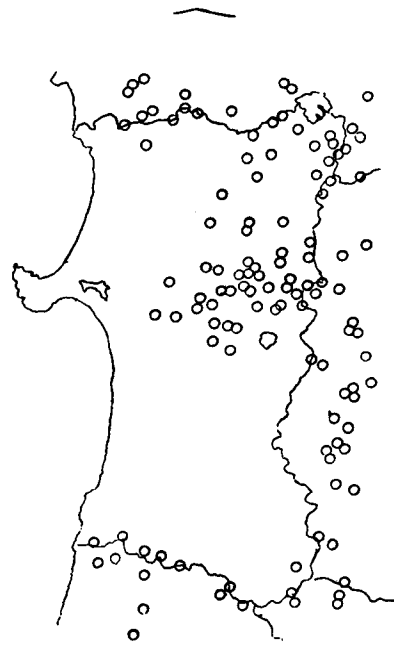
(14)

森を国語辞典で引いてみると広辞苑では「①樹木が茂り立つ所。②特に神社のある地の木立。③（東北地方で）丘。」と記し、①と②には万葉集を出典として添記しているのは、初版は未見だが、二版以来変わっていない。日本国語大辞典では、「①神社などのある神域で、神霊のよりつくこんもりと茂った所。②樹木が多くこんもりと茂った所。」として、万葉、源氏、新古今などを出典としており、更に方言として①土地の小高い所、丘（青森県、秋田県）（むりと転訛して琉球）。②円錐形の山（奈良県吉野郡大塔）。③塚、墓（青森県三戸郡五戸）など④まで詳記されている。次いで語源説を数々あげているけれども、丘や山の意味ではモリ（盛）の義（和訓掇・国語の語源とその分類、大島正健、万葉集短歌論講、折口信夫）や朝鮮語で山の意のモリから（日本語の起源）などが列記されている。

奥羽北端の三県の地図を見れば、標高を付記している森名称、つまり山名が驚くほど多いのに気づくはずである。いずれ悉皆調査をしてみたいと思うが、十年ほど前に六十万分の一地図（以後地図Aと称する）で、何々森と何々森山の山名の採集をしてみたことがあり、図示したのはその折のものであり、傾向だけはわかるであろう。

県境の山も加え、秋田県の前記山名は七十未満で、最高峰は田沢湖東北方の県境の笹森山1541mで、次はその南方で、同じ県境の湯森山1472mであった。

何々森と何々森山の相違は、森という用語が山を意味するという認識が希薄になり、山



森の名称の山名の分布

を更に追加したと考えられる。現に地図上では何々森だが、日常は何々森山と山をつけて呼んでいる話も聞いている。秋田市内の仁別の「別」が川を意味するのを忘れて、これに「川」を加えて仁別川と通称するようになった事実や、米内の「内」が沢を意味しているのにご丁寧に「沢」を付け足して米内沢という地名が生まれたのと同じように解釈してよいだろう。言うまでもなくこの場合の内や別はアイヌ語であり、森イコール山には朝鮮語説もあるようだが、日本語で盛り上がったところと解しても支障ないと考えている。

その後、二十三万五千分の一地図で（以後地図Bと称する）で採集しなおしてみ、前回地図Aを用いてあたってみた時の大約二倍、即ち百五十八の山名を探し出すことが出来、縮尺によってこんなにも違うものかと驚かされたのである。余談だが、地図Bでは明善森が明菩森に、水晶森が水昌森になっていたり、数カ所のミスプリントが見受けられたが、秋田市の穀丁が殺丁になっていたのには

仰天させられた。

最近二十万分の一地図（以後地図Cと称する）を入手したので、地図と比較してみると、大きな地図が必ずしも記入事項が多いとは限らないのがよくわかった。

例えば山形県との県境をみると地図Bで見ると、水晶も（前期のように水昌森になっている）から県境を北上すれば黒森、出穴森と並んでおり、水無大森を起点にして県境上を西進すると間もなく、秋田県域に百宅大森がのぞまれるはずである。それが地図Cでは出穴森も百宅大森もブランクになっている。両者とも山名辞典にはきちんと掲載されていて、「であなもり、出穴森、秋田県雄勝郡雄勝町と山形県最上郡真室川町との境、奥羽本線及位駅の南東9km、869m（下略）」「ももやけおもり、百宅大森、秋田県由利郡烏海町、矢島線羽後矢島駅の南16km、890m（下略）」と記述しており、それらの山が記入漏れとはどういうことであろうか。大凡必ずしも小を兼ねずということになるので、記入事項の取捨選択は何か基準が設けてあるのかを刊行元のS社に問い合わせた。

投函して五日目に返答がきた。その対応の素早さには賛辞を呈したい。その要点を摘記すれば「ご質問の山名についてでございますが、山名に限らず地図に記載いたします項目の中で、行政情報（都道府県市町村界・名称）、道路、交通（鉄道等）河川等の基本的な項目以外の数あるなかからから選択して記載する山名、大字等の採用基準は実際のところ設けておりません。これに関しましては基準を設けますと粗部と密部で文字の量的な差が発生いたします。そのため、なるべく文字も平均化するように編集者の主観的な判断にてつくられている実情でございます。特に指摘いただきました山名につきましては行政の境に存在することが多く、文字やマークの境界線と重なる部分については境界線を切らなければなりません。分県地図の作成にあたりまし

ては境界線の重要性を上ランクとさせていただいております。」と言うことである。

さすがに1000m級の山はカットされていないようだが、900mに近い山が主観で省略されては、何とも釈然といたしかねるが、実情は摘記の通りである。敢えて後考のために記しておく。

(15)

切上という地名は家蔵の地名辞典には記載されていない地名だが、深田新一郎氏のご論考によれば、岡山・熊本に各1、富山・京都・三重に各1、滋賀に3、秋田に5、計16を数えるという。

秋田の5とは秋田市二井田、中仙町沖ノ郷、千畑町安城寺、仙南村金沢西根の小字名切上と大曲市四ツ屋の切揚を指している。

筆頭にあげた秋田市の切上については、物故された三浦鉄郎会長のご労作、秋田の地名に次のように記しておられる。

「地名伝説に『元禄九年（1696）、大野に撫斬事件があり、その際、斬り上げが終わって引き上げる武士と、斬るに及ばずという恩命の使者とが出会ったところだ』として切り上げの名がつけられた（仁井田郷土誌）。キリには切、桐、吉里、錐、喜里、霧の当て字があるが、多分『切り開く』すなわち新開、新墾、新治の意であろう。著者は後者が妥当と思う。」

久保田藩士と住民とのトラブルは史実であろうが、それに由来する地名ではあるまいという記述だが、私もその通りであろうと思っている。

地名の近傍に何か符合したくなるような事実があって、それに引き込まれてしまうような現象は折々見受けられる。秋田市寺内の油田（あぶらでん）もその好例で、古四王神社の灯明料のための神田なのだが、近くにかつては本邦有数の産油量を誇った八橋油田があって、それに由来している地名だろうと信じて疑わぬ人々が、その住民の中にもいるので

あって、一度そのように認識されてしまうと、それを正解に引き戻すには大変なエネルギーを要するのである。

秋田市仁井田の人々も撫斬事件関連地名と確信しているようだし、市バスの観光バスもこの近くを通る際には撫斬事件を説明して地名語源としているそうだが、謬説を公布してもらっては困るではないか。

県内の切上では大曲市のように伝承が消えてしまっているところもあるけれども、仙南村のそれは、かつて早魃の折りなど水引き争いが頻発したと言われ、西根堰の堀削工事の作業打ち切りの場に付けられた地名という見解があり、千畑町の切上も払田の柵跡の南隣りであって、開墾作業終了の意味にとるべきであろう。

因に、青森県に切上はないが、上北郡六ヶ所村倉内に切揚場があり、むつ市田名部に剪明が、南津軽郡平賀町と上北郡野辺地町に切明があり、新しく道を切り開いた所とキリアケは解しているが、参考になるであろう。

(16)

六年近い室蘭での生活で、最も親しかった友人F氏と半世紀ぶりに連絡がついて、秋田で再開の機会を得た。彼も私も白楊寮で生活したのだったが、市の北端に近い知利別に寮は所在していた。塵別という表記もあったらしいが、我々は知利別より使ったおぼえはない。

塵別という文字づらは敬遠されたのであろうが、寮には五味君がおり、会社の技師長が葛(クズ)さんだった頃、冗談に「チリ別のゴミですが、クズ技師長おられますか。」という電話を想定して大笑いした記憶がある。この知利別はチル・ベツというアイヌ語で、チルは鳥であり、かつては鴨の大群が川を埋めるほどだったという。

日本製鉄の輪西製鉄所へ毎日バスで通勤したわけだが、この輪西には諸説あり、(1)ワ・ネ・ウシ・イ〔(入江が)輪・になって・い

る・処〕(2)マ・ネ・ウシ・イ〔淵・になって・いる・処〕(3)ハル・ウシ・イ〔食料・群在する・処〕などの説があるようだ。この輪西の東隣りの駅をかつては東輪西駅といったそう。ところが駅員がそれを連呼すると「東は西」と聞こえて失笑されるので、私どもが就職した頃は東室蘭駅と改称されていた。

その室蘭だが、モ・ルランで小さい坂という意味だろうといわれており、明治の半ば頃までは室蘭と書いてもモロランと発音されていたが、漢字に引かれてムロランが正式呼称になってしまったと伝えられている。

北海道の旧地名を語るにはアイヌ語の知識が必要だが、日本海側のアイヌ語地名南限は一応秋田県ということになっており、まつろわぬ蝦夷や俘囚がアイヌ民族ではなかったにしても、共通の文化圏で生活していたと考えられるであろう。そうだとすれば、現在のアイヌの人々の考え方は当時の東北人のそれと共通していたとも考えられ、例えばアイヌ民族の川に対する受け取り方は、川は海から山へ昇っていくと解し、川上へ向かって右岸、左岸を称しており、現今の吾人の感覚とは逆なのである。

昭和四十年の住居表示制施行の際、秋田市の川尻の一部が川元と改称された。川尻と川元では天地懸隔と言おうか、主客転倒と言おうか、とんだ暴挙だと思い、当時の審議会に参加していたご仁にさぞ決定まで紛糾したろうと尋ねると、意外や意外、きわめてすんなりと決まった由であった。

しかしながら、よく考えてみると、アイヌ文化と共通する文化をもつ我らの祖先の思考そのもので川尻を川元と言い換えたのであり、久しい間、底ごもっていた先人の血がなさしめた業であったと考えるべきであろう。そう考えれば何人も納得しうるはずであり、遠々き代の祖霊をもって冥し給うべし。